

タイヤル（泰雅）族の発祥神話と移動系統からの考察

伊藤 順子

日本大学大学院総合社会情報研究科

A Study of Myth and Diversification of the Atayal Tribe

ITO Junko

Nihon University, Graduate School of Social and Cultural Studies

Even now the Atayal tribe, aborigines in Taiwan, have no written language. Therefore, throughout the centuries their myth has been transmitted orally.

The Atayal people are a hunting people. So they were constantly on the move looking for wild game. There are classified into three groups by genealogical and classificatory. This work focuses on influence of diversification and climate for the myth.

1. はじめに

民族の神話を概観すると、神話が如何に深く自然と関わっているかを知ることができる。神でさえも自然が姿を変えている場合が多い。自然現象、あるいは自然の産物それぞれに神を感じた創生期の人々は、自然を崇拝し、畏怖したことであろう。ここに、自然とともに生きる謙虚なヒトの姿を見る思いがする。台湾原住民の1つ、タイヤル族にも豊かな数々の神話がある。文字を持たない彼らは、それらを全て口承してきた。タイヤル族はその発祥より移動や分岐を繰り返し、北は台北県、南は南投県、東は花蓮県、西は苗栗県など原住民の中では最も広範囲に分布している。筆者は2007年北部、2008年西部、2009年東部において現地調査を経てきた。これは彼らの移動の系統に則したものである。本稿では、タイヤル族の発祥神話と系統との関連について考察する。この場合、タイヤル族の居住分布という地理的条件が重要となるので、次にタイヤル族分布の略図



を挙げる。

図1. タイヤル族の移動分布

出所：黒蒂巴彦『泰雅人的生活型態探源』南天書局、2002年、p.15。

2. タイヤル族の系統所屬

移川子之蔵、宮本延人、馬淵東一によって著された『臺灣高砂族 系統所屬の研究』¹では主として口碑伝承を通じて、グループの移動や分岐の過程を丹念に辿って系統による分類を行った。これが「系統所屬」という概念である。かつてのタイヤル族は狩猟と焼畑という2つの食料調達のためにより、移動生活を余儀なくされていた。移動や分岐、混淆などを繰り返す中で、居住地の自然環境の差異は、居住可能地の拡大の変遷により生じた「系統」というグループ毎に、それぞれ独自の文化の発達や変化を促したと思われる。馬淵東一の指摘の通り「同じ種族でも、遠隔地に分派移動して原住地との交渉が久しく杜絶えたり、外来分子を交えたりすれば、次第に地方色が濃厚に現われる。」²からである。

『臺灣高砂族 系統所屬の研究』では系統を考える際、「發祥より甫めて、離合分散の徑路を推考せねばならぬ。」³とあるように、系統分類の起点を、まず各部族の發祥地や中心となる故地に置いている。ここでいう發祥地とは祖先發祥に係わる地であり、故地とは祖先居住の旧地を指す。次に移動の傾向を遠心的傾向と求心的傾向に分けて論じている。遠心的傾向では、人口の増加、敵対関係、土地の良否などの移動分散の原因を挙げ、求心的傾向では人は過去を追慕する心理を持つとして、故地を離れて遠く四方へ移動分散していく中で、逆に帰るべき求地探検の結果、いくつかの發祥伝説が誕生したとみている。タイヤル族の發祥地としては、以下の3地点を挙げている。すなわち、ピンスブカン (Pins bukan)、大覇尖山 (Papak-waqa)、白石山 (Bunobon) である。

(図2参照、發祥地を△でポイントアウト、なおピンスブカンは「仁愛」という地名のところを指す)

ただ、この『臺灣高砂族 系統所屬の研究』は1935年に発表されたものであり、その後の民族運動等により、現在は白石山を發祥地として東漸した部族は、タイヤル族からタロコ (太魯閣) 族という他種族に分離している。

タイヤル人の始祖達はそれぞれの發祥地から移動分散を繰り返し、北部 (烏来 Wulái・桃園 Taoyuán)・西部 (苗栗 Miaoli・東部 (南澳 Nanào・宜蘭 Yilan) 方面へと、それぞれの終着地点を得た。筆者はこれ

ら3方面を調査し、また先行研究にも依りながら、それぞれの發祥地や移動の系統により、風習や發祥神話に差異のあることを認めた。次章では、この系統と發祥神話についてみていきたい。

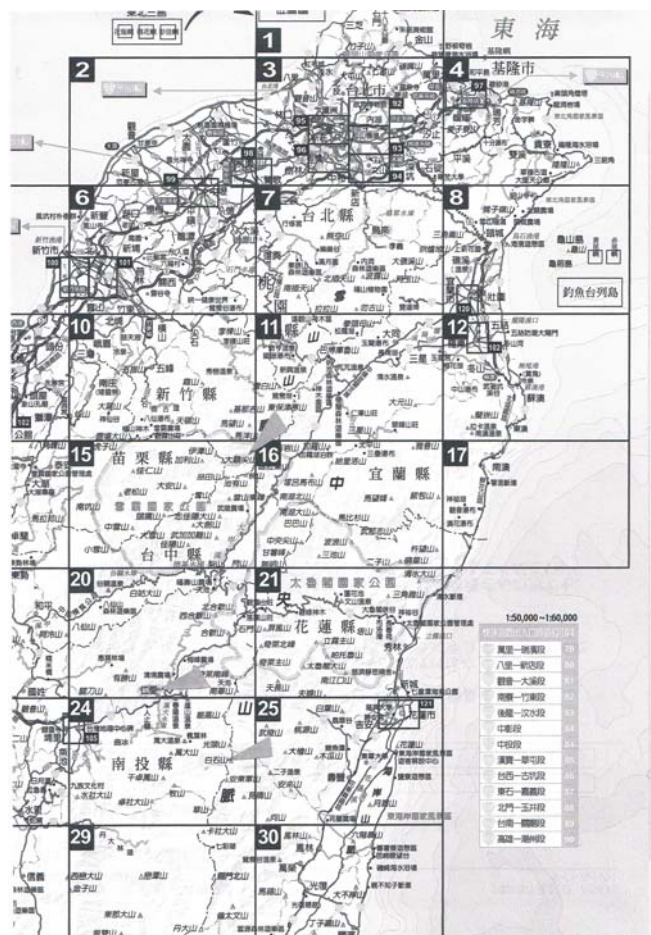


図2. 發祥地

出所：連鋒宗編『全台灣道路地圖』上河文化股份有限公司、2007年、台灣分割索引圖-上。

3. 發祥神話

タイヤル族には、彼らの發祥地と考えられている3カ所—ピンスブカン、大覇尖山、白石山—にそれぞれ異なる發祥神話が口承されてきた。ただし、ピンスブカンと大覇尖山には類似の石生人神話、洪水神話があり、白石山にはさらに特定の樹生人神話がある。(「石生人神話・樹生人神話」は李福清『神話与鬼話台湾原住民神话故事比较研究(增订本)』社会科学文献出版社、2001年の用語による)

3.1 ピンスブカンの発祥神話

ピンスブカンとは、現在の南投県仁愛郷発祥村ムスバン（瑞岩）部落に伝説の巨石があるところを指し、「岩の割れたる所」⁴との意である。ここではこの巨石から祖先が誕生したとされている。伝承によりいくつかヴァリエーションがあるが、その中で代表的なものを1つ以下に記す。

抑、我々アタヤルが（石を）破つて出た起りは、其は一つの大きな石が有つたといふことだ。（それが）パッと二つに割れて、二人の男と一人の女がその破裂した處から出た。彼等が見ると、（周囲は）只純粹の深林と獸類と丈であつた。そこで一人の男は、「私は地上に居るのが厭になつた」といつて、その破裂した處へ再びはひつてしまつたさうだ。彼等（他の二人）は引止めようとしたかつたが、もう已にはひつて行つてしまつたさうだ。其で、「如何したら、我々は殖える様になるだらうか」といつて、彼等はその事ばかり何かにつけていつも考へてみた。抑、始めに（女は）、山の鞍部へいつて胯を廣げて風に吹かせたら、孕むだらうと考へたが、孕まなかつたさうだ。抑或時、二人が關係（交接）すれば子を孕むやうになるのではないかと考へたが、彼等は直には（其の道を）了解することが出来なかつた。彼等は尻の孔、鼻の孔、それから耳、口と、凡ての孔に試みたが、それではなかつた。すると或時、一匹の蠅がブーンといつて飛んで来て、胯の間に止まるのを見た。そこで考へて、「それは神の暗示ではあるまいかねえ」といつて、彼等が試みると、生物の考（性慾）が、本當にその通りになつた（満足を得ること）さうだ。暫くすると女の體が異様になつて、その腹が段々に大きくなつて來た。月が到來すると、家に引籠もつた（子を生むこと）。それで、その父と母の喜は、實に非常であつた。（石が）破裂して我々アタヤルが増殖する様になつた起原は、其な事である。⁵

このようにして、漸次人口が増加していったので、

最初の分裂がおきた。それはピンスブカンのほど近くにスバヤン（sbayan）という地名があり、それは「相別れた所」⁶という意味であることから、そう考えられている。そのように分裂・拡散を繰り返していたであろうことが、以下に挙げた地図からも、稜線にそつて集落が存在することから確認することができる。『臺灣高砂族 系統所屬の研究』の「緒言」にまさに「山地に於て人口増殖の結果、土地の狹隘を感じ、求地探件檢の爲め山頂を傳ひ歩いて、眼界の展望を期し、美地の發見に努めたといふ彼等の物語」⁷とある通りである。

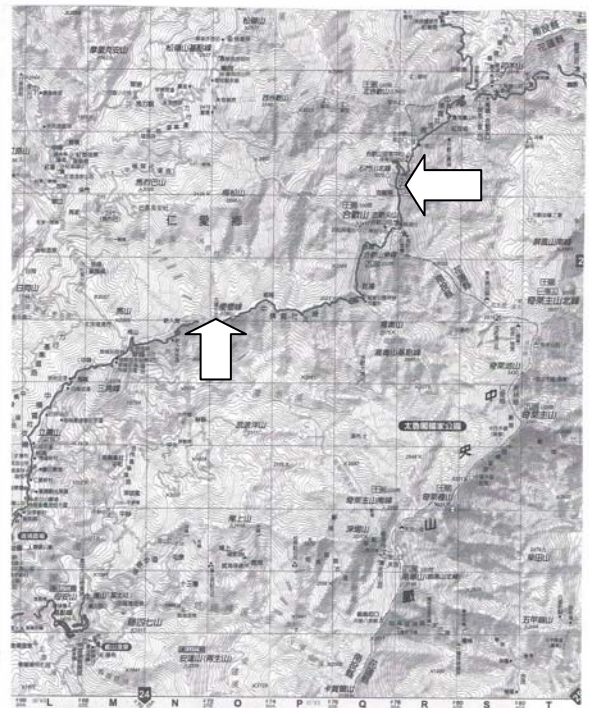


図3. ピンスブカン周辺の中央山脈の支脈の1つ（筆者、図表内矢印で表示）

出所：前出『全臺灣道路地圖』2007年、20。

3.2 大霸尖山の発祥神話

発祥地をピンスブカンとせず、彼らの祖先は直接大霸尖山から降り立たとする説である。3000m級

の山々が幾重にも連なる雪山山脈に位置する大覇尖山（3492m）の威容は、確かに人をして聖なる想起の念を起こさしめるに足るといえよう。以下に大覇尖山の発祥神話を挙げる。

昔パツパクワ（大覇尖山）と称するところに巨石あり。その石二つに割れて中より二人の男女出でたり。しばしば何事もなかりしが、いつしか彼らに好奇心起り、二人は目と目とを接し鼻と鼻とを接したり。されど何事もなし。それより互いに抱きつき腕下を合わせたも変わりたることもなし。いかなれば互いに同じ物を所有するや、用なきものを神は授くることなからんとて、臍と臍とを合わせたも別にこれぞと點頭すべきこともなし。二人はしばし思案にくれけるが、折しも金蠅の飛び来りて重なり合えるを見れば、二人は早速その真似せんものと、一人の股間を見るに隠れたる一穴を見出したり。指にてそれを探れば置く深し。これぞ男の持てる一物を入れるべきところならんと、二人は蠅に模倣て重なり合えり。それより幾年経たりしか、次第次第に子孫も増加して所も狭くなりしかば、美地を求めて移らんものと二隊に分かれて出発せり。そのとき一方の頭目は、我ら今二つに分かれて好むところに赴くも、人数に多寡ありては後日のためならず、人員を平分せんとて関をつくってその強弱を比較しぬ。しかるに一方の頭目は機智に富み、半数を岩陰に隠し他の半数をして喊声を揚げしめれば、その声甚だ弱し。されば一方の頭目は欺かるるとは知らずして、さらに隊を両分してその半数を送りて再びともに関をつくりしに、弱しと思ひし隊の喊声は今度は樹木の枝も折れんばかりに響きたり。それを見たる一方の頭目は、よくも我らを欺きしぞ、汝らこそいわゆる不俱戴天の仇なれとて、目を怒らして呪いたり。それよりその隊の者と見れば必ず馘首するに至れり。⁸

ここでは、ピンスブカンと同じ巨石というモチーフが使われている。また、タイヤル族ではヒトの発祥伝説の次に来るものとして、今度は彼らが淘汰さ

れる洪水伝説があるが、これもピンスブカンと共通していることから、両者は、同一の根幹を持つと考えられている。ここで洪水伝説について触れておく。

始祖達にとって、ヒトの数は力そのものであった。求地をし、新地を切り開くと言っても、狩りをするといっても、ヒトの労働力が頼みであるからだ。初め血族だけの小さな集団が、ヒトを増やすには近親婚に依らざるを得なかった。しかし、徐々に倫理的になって行く神話の変遷⁹の中に、インセスタブーの象徴としての洪水伝説を見ることが出来る。

たまたま大洪水ありて、パツパクワの頂きのみ残りたれば、みなみな先を争いそこに集まれり。それより一同協議して、にわかには海水の溢れ出でしは必ず社¹⁰に禁忌を犯せるものあらん、謝罪せざるべからずとて、まず犬を海中に投ぜしも水退かず。つぎに老人を流せしもお水退かず。さらば犯則者他にあらんとて社中を検査せしに、兄妹にて密通せる者あるを見出したれば、その二人を海に投ぜしに、水たちまち退きたり。¹¹

また、祖先が別の島から漂着したという過去の記憶が、洪水のような水に関した伝承となった、という見方もあるようだ。¹²

3.3 白石山の発祥神話

中央山脈の白石山（3110m）は3つの発祥地のうち、最も南に位置する。タイヤル族の分布の中では東南部を占めるこの地域は、前述した通り『臺灣高砂族 系統所屬の研究』（1935年）では「小異は在るにしても、土俗、言語の上に分離すべからざる一致点があり、随つてこれを大なるアタヤル種族中の一部と、見做す事が至當であると思はれる。」¹³と扱われていた。しかし、2004年1月には言語や文化が異なることから、この地域に居住するタイヤル族は新たにタロコ族として公認されている。本稿においては、発祥神話に関しては、この地域にもピンスブカンと大覇尖山とに共通な石生人神話や、タイヤル語の「オットフ」（神霊の意）が神話中にあることなどから、マクロな意味でのタイヤル族の神話とし

て扱うこととする。以下に、白石山地域に特定の木成神話を挙げる。

古昔、中央山脈のブノホン（白石山）と称するところにすこぶる大なる一樹あり。その名、今に伝わらざれど、半面は木質にして半面は岩石よりなりて、いと珍しきものなりき。木の精化して神となりしか、中より男女の二神出現せり。この二神、性交して数多の子を産めり。その子また子を産みて、数世の後には所も狭くなりぬ。

14

白石山の発祥神話に特定の樹生人神話には、他にも巨樹の下部から獣類、人類、蛇類、鳥類が出たとするものや、老木があってその木の枝や根の間から男女が生まれた、とするものなど様々なヴァリエーションがある。ここを発祥地とした子孫たちは、やがて独自の系統を形成していくのである。

4. 系統と発祥神話

『臺灣高砂族 系統所屬の研究』では、「恐らく口碑傳承の中で、比較的史實に近いものは、系譜關係と移動關係のものであらう」¹⁵との観点から、系譜と移動を中心に系統所屬研究が行なわれた。確かにそこでの発祥神話に基づく発祥地の確認は、移動系統の起点を考える上で非常に重要な意味を持つことは疑いがない。しかし、ここで、そもそも発祥地の前提となっている発祥神話と歴史との境目ということを考えてみたい。古老によって語られる系譜がある程度までは事実に基づいていたとしても、「悠久の昔となれば、出生の神異に彩られ、縹渺模糊として、而も幻想的」¹⁶な物語となっていることが十分想定されるからである。

神話の収集は、フィールドワークにおける、インフォーマントからの聞き取り調査による、非常に個別な伝承ということになる。記録という客観的な資料に基づくわけではないので、どこで神話が終わりどこから歴史が始まるのか、が問題となる。また、インフォーマントAの伝承とインフォーマントBの伝承とは、ある点は類似しているが他の点では異なっているなど、神話と歴史との間には無秩序な外観

があるように思われる。レヴィ＝ストロースは、「神話が歴史になるとき」との講話の中で次のように述べている。

対立—私たちがよくやる神話と歴史とのあいだの単純な対立—が明瞭なものではなく、中間レベルがあることです。神話は静的なもので、同じ神話要素が何度もくりかえしくりかえし結び合わされます。しかしそれは閉鎖的体系のなかにあり、その点で歴史とは対照的です。歴史はもとより開放的ですから。

歴史の開放的性格が確保されているのは、神話細胞、あるいはもともと神話的であった説明のための細胞の並べ方、並べ変え方が無数にあるからです。歴史を見れば、同じ素材を使いつつも（中略）それぞれの集団、氏族、系族などに独自の解釈を作り上げることが可能であるとわかります。¹⁷

一見、無秩序とも見える閉鎖的な神話と開放的な歴史との関係の中に、その種族の精神的な独自性を形成する重要な要素があるということである。発祥地を経て派出移動し、部外婚や異種族との相乗も包含しつつ、彼等は系統ごとに独自の神話を伝承することにより、彼らの種族の同一性を保ち続けているということが出来る。

発祥神話が起こった3地点のうち、白石山を起点とする部族には、糞尿譚など独特の神話がある。彼らの大部分は中央山脈を越えて、東漸し花蓮方面まで拡散していった。やがて彼らがタロコ族として分離することを考えるとき、神話と歴史の深い繋がりを思わざるをえない。対して、ピンスブカンと大覇尖山を発祥地とする部族の中には、両者を別種として扱う神話だけではなく、次のように両者を関連づけた神話も残っていた。

昔シカヤウ方面にピンスブカンと称する所あり。二人の男女そこより現出せり。彼ら兩人はわずかに二三尺四方の地を耕して粟を播き、その実取りて生活せり。その頃は今日のごとく多くの粟を炊くことなく、ただただわずか一小穂にて

一日の食を得たるものなり。また獸類も呼べば来たりて毛を与え、その毛を茅の上に載せおけば肉を化せしものにて、少しも勞することなかりき。しかるにある日、にわかには洪水ありて地上は一面の大海となる。二人は驚き、どこに遁るべきやと四方を見渡せば、パツパクワカ（大覇尖山）の頂きのみ海中より突出するを見れば、急ぎ二人はともにそこを目あてに遁れたり。それより兩人、力を協せて水を押しやりしに、水はたちまち退き去る。その時水勢甚だ急激なりしかば、地を掘りて今日の谷を造れり。かくて兩人ここにおること数十年、数人の子を得たれば、これを分かちてガオガン、溪頭、南澳の諸地方に移住せしめたり。¹⁸

この2地点に、ピンスブカンから派生したグループが大覇尖山へ移動したというような、何らかの関係があったとしても、最終的には全く別の系統を形成していく。ここに発祥地ではなく、系統による種族の同一性を考えることが出来る。

5. 結語

本稿では、タイヤル族の発祥神話と移動系統ということ考察してきた。完全に閉鎖的な時間の中に存在する神話に対し、系統はその神話のレベルから歴史という開放的な時間までの長遠な流れを包含している。レヴィ＝ストロースが神話を「静的・統合的歴史観」¹⁹と呼んでいるように、神話の中では太古とか今といった特定の時間が刻まれているわけではない。タイヤル族においては、神話や系統を同時に口碑伝承することで、この神話独自の論理構造を背景にした時間の持つ統合性と、移動系統による現実的開放的な時間の流れという両者がダイナミックに融合し、彼ら特有の同一性を生み出している。

筆者が調査を行った移動系統の終着点ともいえる、東西北のそれぞれの地域には、婚礼儀礼などそれぞれに特有な風俗や習慣が見られた。『臺灣高砂族系統所屬の研究』にも、系統ごとに服飾の色彩や柄、また「人」の呼称などの言語の違いが挙げられている。これらの系統による個別性は、世代数からみると大体200年から400年ぐらいの、移動系統の時間的経

過を経て、徐々に形成されていったと考えられる。このような差異は、タイヤル族に伝わる祖先から綿々と受け継がれてた口碑伝承という文化とともに、そのままタイヤル人のアイデンティティの差異に深く関与している。

タイヤル族の移動分布の系統は、単なる発祥神話の起点の違いだけでなく、分化にともなう居住環境の違いや非タイヤル族との接触による外部要因など複合的な影響を受けている。部族的な割拠対立が著しく、深山に点在していたタイヤル族の文化やアイデンティティを、発祥神話という点から系統という線で捉え直した。ここに神話という閉鎖的な時間から系統という開放的な時間への変化をみる事ができる。

¹ 移川子之蔵、宮本延人、馬淵東一『臺灣高砂族系統所屬の研究』臺北帝國大學土俗・人類學研究室調査、1935年。

² 馬淵東一『馬淵東一著作集』第2巻 社会思想社、1988年、p. 276。

³ 前出『臺灣高砂族系統所屬の研究』1935年、p. 2。

⁴ 同上、p. 22。

⁵ 小川尚義、浅井恵倫『原語による臺灣高砂族傳説集』刀江書院、1935年、pp. 34-36。1931年大溪郡大豹社における採集。

⁶ 前出『臺灣高砂族系統所屬の研究』1935年、p. 23。

⁷ 同上、p. 11。

⁸ 紙村徹編『神々の物語』草風館、2006年、p. 33。ツオレ群マビルハオ社における採集。

⁹ 伊藤順子「インセスタブーについて」（『比較文化研究』88号、2009年9月）pp. 167-168。タイヤル族のインセスタブーに関する神話には他にも、「兄弟姉妹の結婚は不吉」という直接的な話がある。

¹⁰ 地域団体の単位。小さいものでは、2～30戸、大きいものでは200～300戸ぐらいのグループ。祖先を同じくし、一定の地域を領有し、同様の慣習を持つ。

¹¹ 前出『神々の物語』2006年、p. 32。ツオレ群ローブゴー社における採集。

¹² 前出『臺灣高砂族系統所屬の研究』1935年、p. 11。

¹³ 同上、p. 22。

¹⁴ 前出『神々の物語』2006年、p. 44。セデク群霧社における採集。

- 15 前述『臺灣高砂族系統所屬の研究』1935年、p. 2。
 16 同上、p. 2。
 17 クロード・レヴィ＝ストロース『神話と意味』大橋保夫訳、みすず書房、2009年、pp. 56-57。
 18 前出『神々の物語』2006年、pp. 23-24。ツオレ群
 ボンボン社における採集。
 19 クロード・レヴィ＝ストロース『構造・神話・労働』三好郁郎・松本カヨ子・大橋寿美子訳、みすず書房、2008年、p. 83。

(Received: May 31, 2010)

(Issued in internet Edition: July 1, 2010)

参考文献

- 余錦福「泰雅族 Qwas Lmuhuw (朗誦式歌謡) 即興吟誦下の歌詞與音樂思惟」『玉山神學院學報』第 15 期、2008 年
 鄭光博『Sm'inu puqing kinhulan na Tayal (懷念、遙想泰雅故鄉的根源)』國立政治大學民族研究所碩士論文、2006 年
 高理忠『民族音樂 教育對泰雅文化復振影響之研究—以復興鄉為例』國立政治大學民族研究所碩士論文、2008 年
 周錦宏編『原住民部落歌謡 泰雅族・賽夏族』苗栗文化局、2005 年
 吳仁惠『烏來地區泰雅族祖靈祭儀式流變之探討』台北師範學院、2004 年
 田哲益『台灣 原住民歌謡與舞蹈』武陵出版有限公司、2004 年
 山田陽一編『自然の音・文化の音』昭和堂、2000 年
 馬淵東一『馬淵東一著作集』社会思想社、1988 年
 小川学夫『民謡の島の生活誌』PHP 研究所、1984 年
 楊南郡『幻の人類学者 森丑之助』笠原政治・宮岡真央子・宮崎聖子編訳、風響社、2005 年
 東洋音楽学会編『南洋・台湾・沖縄音楽紀行』音楽之友社、1968 年
 伊能嘉矩『伊能嘉矩 蕃語調査手冊』南天書局有限公司、1998 年
 周婉窈『台湾の歴史』石田豪・中西美貴訳、平凡社、2008 年